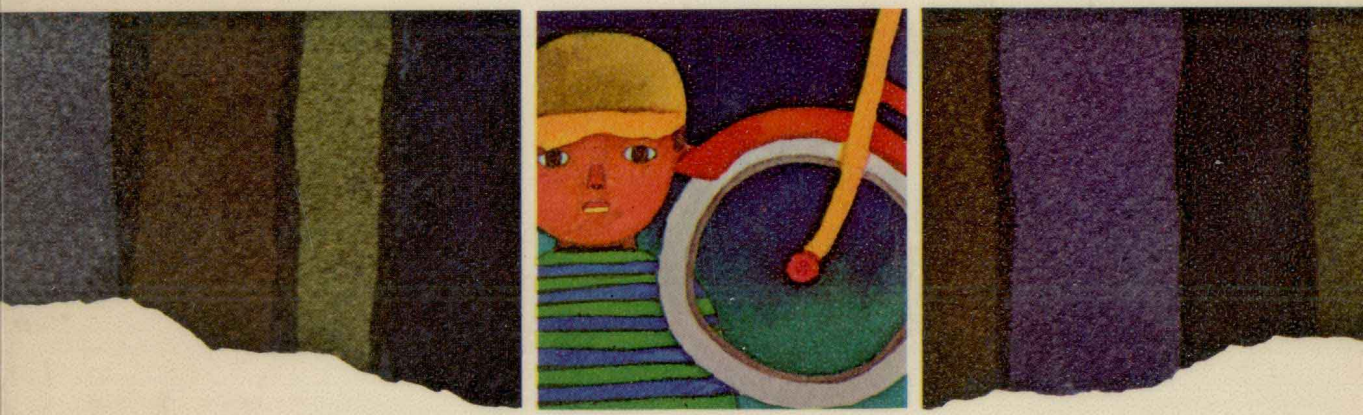
KODOMO TOSHOKAN

テングの庭

猪野省三



子ども図書館——大日本図書

〈著者紹介〉

猪野省三（いのしょうぞう）

1905〜
栃木県生まれ。宇都宮中学校卒業後，小学校で教員生活をおくる。1927年上京，藤森成吉，中野重治らと日本プロレタリア芸術連盟を創立，プロレタリア童話運動を興し，「教育新潮」「少年戦旗」誌上に作品を発表した。戦後，日本児童文学者協会の創立に参加，現在同会理事。著書に『ゆかいなクルクル先生』（泰光堂）『希望の百円さつ』（桜井書店）『化石原人の告白』（学研）などがある。

〈画家紹介〉

市川禎男（いちかわさだお）

1921〜
東京生まれ。1940年，川端画学校修。現在，挿画家として活躍している。日本版画協会，日本美術家連盟，児童出版美術家連盟に所属。1951年，日本童画会賞，1952年，日本版画協会根市賞受賞。1958年，著書『子どもの舞台美術』（共著・さえら書房）でサンケイ児童出版文化賞を受ける。

NDC 913
テングの庭
猪野省三
大日本図書 1969
97 p. 22cm

小学校中・高学年向

子ども図書館

1969年10月20日 第1刷発行
1974年3月15日 第3刷発行

著者 猪野省三／発行者 佐久間裕三／発行所 大日本図書 東京都中央区銀座1—9—10〈〒〉104 東京 (03)561—8671〜9 振替 東京 219番／印刷 東洋印刷／製本 岸田製本

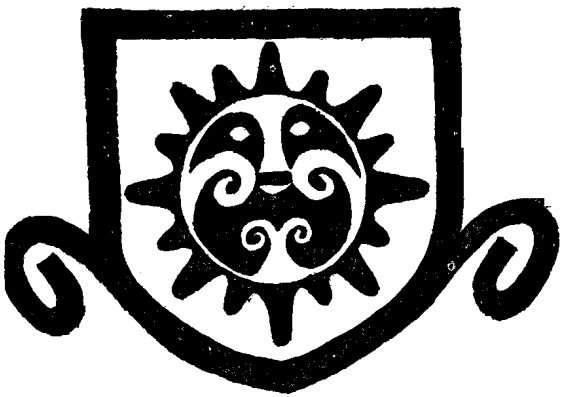
テングの庭 ©1969 猪野省三

8393—217407—4398

子ども図書館

テングの庭

猪野省三



大日本図書

もくじ

黄金のマス・5
テングの庭・25
ぬすまれた自転車・43
ビョウブ山の魔もの・63
積極的で誠実な作品＝横谷　輝・95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　杉田　豊
画　市川禎男

黄金（おうごん）のマス

第一章

一

幸市が、五年生のときでした。

六月の第一日曜日に、秋葉川の白原地区で、マスつり大会がおこなわれました。

つりがなによりもだいすきな幸市は、ぜひ、大会にでて、日ごろのうでまえをみせてやりたいと思いました。

けれど、その日、つりをするには、おとなは三百円、子どもは、二百円をだして、きっぷを買わなければなりません。

幸市は、まずしい開拓農家の子どもでしたから、おかあさんから二百円のおこづかいをもらうには、ありったけの知恵をしぼって、死にものぐるいの奮闘をしなければなりませんでした。

おかあさんは、「おまえにあげるお金なんかありませんよ。ありませんよ。」といいはっていました。

幸市は幸市で、「一生のおねがいだからよう。よう。」とさいごまでがんばりました。

とうとうおかあさんが、幸市のがんばりに負けてしまいました。

「しかたがないから、あげますよ。」
ないはずのお金がでてきたのです。
「けれど、これは、ただのお金じゃあないんだよ。今月の生活費なの、生活費のなかのおかず代をおまえにあげてしまうんだよ。」
幸市は、お金をうけとりながら、「生活費のなかの、おかず代を。」というおかあさんのことばが、とげをのみこむようにちくちくとむねにささってくるのでした。それで、幸市は、
「だいじょうぶだよ。おかあさん。すぐ、もとをとってかえしてあげるからね……。ほんとうだぜ。おれは、約束したことはきっとまもるんだから。」
じぶんの心にいいきかせるようにいいました。

二

マスつり大会の日がきました。
午前八時。幸市は、『象の鼻』のいちばんつき出した岩の上に場所をとって、つりざおをかまえました。『象の鼻』のように川の流れの中につき出しているその岩のまわりは、どろんとしたふかんど（ふかいところ）になっているのです。白いあわをふきながら、急流を流れて落ちてきた水は、岩のまわりで、ゆっくりとうずをまきながらやすんでいるようにみえました。
ふかんどの水は、まわりの木や山の新緑をうつして、底石が緑にそまるほどあざやかに光って

いました。

ドーン。ポン　ポンと、合図の花火がなると、一千びきのニジマスがマス養魚所のいけすから、秋葉川の流れにはなたれました。

いよいよ、つり大会のはじまりです。

幸市は、えさをつけたはりを、ふかんどのなかほどめがけてふりこみました。

五分、十分。

あたりが、きゅうにしずかになりました。みんな心をすまして、浮きをにらんでいるのにちがいありません。

そのとき、むこう岸の川原のほうから幸市をバカにする声がきこえてきました。

「開拓、開拓、おサルの子、赤いおしりでぷうっ、ぷうっ。」

いじめっ子のガキ大将竜二が、いつものように音頭をとって、子分たちにどならせているのでした。

幸市は（いまにみていろ）と心をこらえて山吹浮きをにらんでいました。

十分、十五分……。

「きたぞ！」

ちょん、ちょんと幸市の手に手ごたえが、ありました。と、すうっと、山吹浮きが、ふかんどの中にすいこまれるようにうごきました。

「よしっ！」うでに力をいれて、さおをたてると、さおが弓なりにまがりました。かかったのです。かかったのです。幸市は、はりにかかったさかなをしずかにおよがせながら、岸のほうにひきよせて、ぐいっとひきあげました。と、二十五センチほどのニジマスが、水をはなれて幸市の

手もとへとびこむようにつりあげられてきました。
「あんちゃん、うまいぞ。」
と、ちかくでつっていたおとながやじりました。
幸市は、手ばやくさかなのあごからはりをはずして、えさをとりかえるとすぐ、つり糸をふかんどにふりこみました。
二分、三分。また、ちょん　ちょん、ぐいっとかかってきました。
そうして、二ひき三びき四ひき五ひき……幸市がつりあげるごとにまわりのおとなが、
「うまいぞ、あんちゃん。」とやじりました。
幸市は、おとなのほうをむいていいました。
「おれには、生活がかかっているんだぞ。生活が……。」
それをきいて、おとなたちが、どっと、わらいました。
「生活がかかっているんだよ。生活が……。」
つりあげるたびに幸市がいうと、おとなたちは、ますます大声をあげてわらいました。
幸市は、はじめ、すこし、おどけた気持ちでいったのでしたが、おとなたちのわらい声が大きくなるにつれて、だんだん本気になってきました。そして、
「おれには、生活がかかっているんだ。」
と、しんけんになってどなりつづけました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三

花火がなりました。午後四時。つりをやめて、農協に集まれという合図の花火です。

農協まえに集まって、何びきつれたか、しらべます。そして、たくさんつりあげた人が一等、それから、じゅんじゅんに五等まで、漁業組合支部長が賞品をわたすことになっていたのです。

幸市は、つったさかなをあみのいれものにいれたまま持っていきました。役員のおじさんが、かぞえて「十九ひき」といいました。

やがて、「一等二十二ひき、二等十九ひき、三等十七ひき……。」と発表がありました。

幸市は、二等だったのです。

賞品は、インスタント・ラーメン三十こ入りの大箱ひと箱です。

「つりは、子どもにかなわないよ。なにしろあいつらときたら、無心というか、むじゃ気というか、欲がない、わしらは欲がでるからだめなんだよ。」

三びききりつれなかったというおじさんが、うらやましそうに、だれにいうとなくつぶやいてました。

「おじさん、うそだよ。そんなこと……。おれには、生活がかかってんだぞ、といいながら、いっしょうけんめい欲をだしてつってたんだぜ。」

と幸市は、いってやりたいと思いました。が、インスタント・ラーメンの大箱をもらったうれし

さでむねがいっぱいになり、なにもいうことができませんでした。

「すげえなあ。十九ひきで二等賞だとよう。ラーメン三十こだってよう。」

子どもたちが、四、五十人もわいわいいいながら幸市のまわりに集まってきました。みんな同じ川でつっていた子どもたちです。その子どもたちのうしろのほうで、あのいじめっ子のガキ大将竜二が、子分をしたがえて、ひかえていました。右手にさげた竜二の網びくには、ニジマスがたった一ぴききりはいっていませんでした。

幸市は、ラーメンの箱を頭にのせ、のせた箱を右手でおさえながら、左手につりざおと十九ひきはいっている網びくを持って、ガキ大将竜二のまえをとおっていきました。竜二は、一ぴきの

網びくをあわてて、うしろにかくし、十九ひきの幸市のびくをうらめしそうににらんでいました。

幸市は、このときのじぶんの心を文にかくとすれば（意気ようよう）とか（凱旋将軍のように）と、かくのかなあ、と思いながら、開拓部落へゆく坂道をのぼっていったのでした。

第二章

一

幸市は六年生になりました。

六月の第一日曜日、ことしもまた、秋葉川のマスつり大会がおこなわれることになりました。ことしは、きょ年よりも大がかりにやるのだと、漁業組合のおじさんたちははりきっていました。

『二千びき放流、賞品は、十等まで、山のごとし。特に本年は黄金のマス大ものをはなし、黄金のマスをつりあげたかたには、デラックス・黄金賞をさしあげます。入漁料おとな五百円、小学生三百円・主催秋葉川漁業組合白原支部。後援白原農協。』と、あちらこちらに、はり出してあるビラにかいてありました。『黄金のマス・デラックス・黄金賞』という文字は、赤い夜光塗料を

つかって夜でも光ってみえるようにかいてありました。
「東京方面からつりテングが二百人も、とまりがけでおしかけてくる。旧市内から五百人もつり師が臨時バスをしたててやってくるそうだ。」
前景気で、白原地区は、おまつりの時のようにわきかえっていました。ポスターをみて、幸市は、
「黄金といえば金だな。金のマスなんてほんとうにいるのかなあ。ほんとうだとすれば、おれは、つるぞ。黄金のマスを……。そして、デラックス・黄金賞は、おれがいただきだぞ。」と、自信たっぷりにむねをたたきました。
きょねん、一等をとった人は、おとなのつりのなかまでは『秋葉川の神さま』といわれているつり師だったのです。神さまといえば名人よりうまい人のことをさすのでした。とすれば、二等をとった幸市は神さまのつぎだから、名人、子ども名人というわけでした。
あのときから幸市は、すっかりテングになってしまいました。
「東京から、どんなに鼻の高いテングがやってきても、この川のことは、おれのほうが知っているんだ。よそからきた人にむざむざと、黄金のマスをつられてたまるもんか。」
幸市は、ガキ大将の竜二のまえでいいました。竜二は、きょ年、幸市が二等賞をとった時から、きゅうに幸市におせじをつかうようになりました。
「なあ、幸市くん、おれにだけ教えてくれよ。あんなにたくさんつれる秘密をさ。」といって、チョコレートをくれたりします。
幸市は、竜二から、くんなんていわれると、せなかがぞくぞくとさむけがするほど気持ちがわるくなってしまいます。

幸市には、どうしてもわすれることができないことがあったからです。
この学校にあがったとき、竜二が命令して、手下の子どもに、
「開拓、開拓、おサルの子。赤いおしりで、ぴいっ、ぴいっ。」
といわせて、みんなで幸市をバカにしたのです。それからずうっと幸市は、みんなからなかまはずれにされていたのです。
竜二は、もうそんなことは、すっかりわすれてしまったのでしょうか？　いまでは、
「幸市くん。教えてよ。秘密をさ。いいじゃないの。」
なんて、なれなれしくちかづいてくるのでした。
「秘密ってことないさ。第一に場所だよ。それにえさだ。えさが第一かな。それから浮下の長さもたいせつだ。それは、場所によってちがうけど。」
そういったけれど、幸市は、竜二にもだれにもはなしたくない秘密をもっていたのです。それは、えさのチョロ虫がたくさんいる場所のことです。谷川づりのえさは、チョロ虫がいちばんです。チョロ虫は、谷川の底石を持ちあげると、石の下をちょろちょろうごきまわっています。金網か、糸か竹でつくった網でとるのです。
けれど川のどこにでもいるわけではありません。流れのすこしはやい浅瀬の石の下にいるのですが、それも、どこの浅瀬にも、マスつりにぐあいのいい大きさのチョロ虫がいるわけではありません。
そのぐあいのいいチョロ虫がいる場所を幸市は、じぶんでさぐりあてて知っていたのです。その場所は、幸市だけが知っていたのです。子どもつり名人幸市のほんとうの秘密は、この秘密の場所からとってきたチョロ虫をたくさん持っているということだったのかもしれません。

二

第一土曜日がやってきました。つり大会のまえの日です。

幸市は放課後、学校の裏門からこっそりとそとに出ました。

もし、竜二とその一党のだれかにみつかったら、

「えさとりにつれていってくれ。」

とせめられるにちがいありません。幸市は、うまいぐあいにだれにもつかまらずに、「マスつり大会前売券売ります」とはり紙が出ている農協の事務所へいって、きっぷを一枚買いました。

きっぷを売っていたおじさんに、幸市は「ほんとうに黄金のマスなんているの。」とたずねました。

「いるとも、川上のマス養魚所で四年まえからそだてていたんだ。もとは、中禅寺湖の淡水魚研究所でそだてたものだってはなしだ。なんでも、突然変異とかいって何万びきのなかに一ぴきくらい色のかわったマスがうまれるんだってさ。そのなかの金色のやつをうまくそだてて、黄金のマスをつくりあげたんだそうだ。その子どもをひとつがい、養魚所のおやじさんがゆずりうけてそだてていたが、子どもが何びきもそだったので、親を川にはなすのだそうだ。四十五センチもある大ものだ。」

「ほんとかなあ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com